



季節を知ったら  
暮らしが楽しくなった

（第一五四号）

立夏りっか

五月五日

## 紙芝居

チョーン、チョーン。おかげ横丁に拍子木を打つ音が響きます。紙芝居師、大谷 勲さんは拍子木を叩きながらおかげ横丁を一回りして、団五郎茶屋の中庭にあるかみしばい広場に戻ります。お客さんが長椅子に鈴なりのときもあれば、少ないときもありますが、それでも紙芝居を始めると人が集まり、立ち見も出ます。演目は五つ。紙芝居を始めた五年前からの「うさぎのまほろ」、「おかげ犬」の前編、中編、後編、そして伊邪那岐と伊邪那美の神話です。集まった客層を見て、そのつど出し物を決めるといいます。

大谷さんは、もともと欽ちゃんこと、萩本欽一さんの元で一〇年近く喜劇を学び、その後、独立しコント集団を結成して、全国を回ったりしていました。そして、五年前からおかげ横丁で紙芝居を演じるようになりました。東京在住の紙芝居師・梅田佳声かぜいさんの元に通い、紙芝居の舞台作りから学びましたが、

「師匠は特にあせい、こうせいと言わなかったですね。とにかく毎日やりなさいと」。今でも紙芝居の新しい演目ができると、DVDに録画して、師匠に送ります。「伊勢の雰囲気が出てきた」と言われるようにもなりました。

毎回、自分との戦いという大谷さんは、お客さんの反応を確かめながら、アドリブを入れたりして話芸を磨きます。

「お客さんに阪神タイガースの携帯入れを二つもらったときはうれしかったですね」。阪神タイガースのファンと言ったのを覚えていたお客さんがわざわざ再訪した際に、大谷さんと奥さんの分までくれたのです。

伊勢の神さまのお膝元での思い出にしてほしいと、一二〇パーセントの力を出して取り組んでいる大谷さん。今日もおかげ横丁に拍子木が響き渡りません。

文 千種清美

